

四十二歳サラリーマン、満員電車に乗り、高層ビルの立ち並んだ都心で、そこそこの企業に勤めて、まともな生活をしているつもりだ。平凡だが、それが難しいのだ。望んだ道ではない。だが充実している。シングルファザーで、息子がひとり。息子の反抗期はもうとっくに終わって、今は中学二年生。安心だ。もうあいつも大人の仲間入りだ。

男二人、気兼ねなく話せて、洗濯や料理もお互いし合って、安定した暮らしをしている。

今年は暑い。例年よりはるかに平均気温が高いらしい。駅まで歩くのは本当に憂鬱だ。蝉時雨が自分の背中に降りかかる度に、額に汗が滲む。電車に乗っても額の汗が止まらなかった。次の駅に着き、落ち着いてきた頃、人がいつものように押し寄せてきた。毎日見る景色。身長は高い方なので、人がどれだけ下を見ているかがよくわかる。皆、下を向いて携帯をいじっている。外を見る者もない。でも、なあ、俺も、下を向いてるじゃないか。

乗り換えをして勤め先のビルの最寄駅に着く。都会は家の近くよりもっと暑い。改札を出るとじっとりした空気に押し返されるような、そんな感覚がする。勤め先のビルは、駅からかなり近い場所なので少し楽だ。

「おはようございます」といつものように声をかけて、パソコンを立ち上げて、書類の整理をして…。いつものように仕事をする。今日は用事があって、午前だけで仕事が終わる。

何も問題なく今日の仕事は終わり、午前退社した。昼頃に、霊園に着いた。妻の墓があるのだ。妻の命日だった。お墓参りというのは午前中が良いと言われるが、それは、お墓参りついでに楽しいことをせず、仏様のことを考えなさい、ということらしく、午前中でなければならぬという決まりはないらしい。どうしてもやらな

ければならない仕事があったので、午前中に行くのは難しかった、と、いないはずの妻に言い訳をした。そんなことを言っても、夕方に行くのは流石に悪いことをしている気になるから、午前退社をして、昼頃には行けるようにした。

青空の下で、綺麗に磨かれた墓石は光を反射して、眩しく光った。

「遅くなってごめんな、千恵」

妻の名前は綾瀬千恵といった。画家になりたいと強く願って美大に通っていた当時、廊下に展示されていた生徒作品の中で、ひとつ、目に焼きつくほど印象的な絵があった。彼女の絵だった。すぐに彼女を探した。そして、会った瞬間、すぐに、彼女への「憧れ」は、「恋」へと変わった。一目ぼれをした。

それから、彼女と色々な話をした。教室が離れていたが、授業が終わると話しに行った。好きな曲、好きな本、自分のこと…。親密になるたびに、彼女の笑顔はどんどんと魅力的になっていった。作品も、もっと魅力的に見えた。そして、二年かけて、やっと彼女と恋人同士になった。

だが、大学四年になっても、自分の才能は開花しなかった。彼女はどんどん才能を開花させていた。いつも廊下には必ず彼女の絵があった。自分の絵は、他人のものと混ざって、見つからないくらい、ぼつんと隅に置かれて、小さく見えた。ある日、デッサンを提出した時に、慕っている先生が言った。

「今まで、ここに来て何をみてきた？」

頭を殴られたようなショックだった。何も言えなかった。が、答えはあった。ずっと、彼女を見ていた。「綾瀬千恵」という人間を見ていた。そのほかは何もいらなかった。だって、手に入らないと思っていたものが、手に入ったのだから。その時は、ショックだけで、でも、尊敬している人にそう言われてしまっっては、もう、吹っ切れ

てしまつて、彼女のことしか考えなかつた。夢を、あきらめた。

そこからは早かつた。就職して、彼女と同棲して、三年後すぐに結婚した。綾瀬千恵は、「彼女」から「妻」になつた。四年後には息子が産まれた。息子はすすくと育つた。やはり遺伝なのか、ずっと小さい頃から、息子はいつもオモチャではなく、クレヨンを握つていた。妻と息子と三人で、大きな画用紙を囲んで、笑い合う時間が、幸せだつた。

そんな時間は、そう長くは続かなかつた。妻に、がんが見つかつた。

妻は、高校の時に、小さながんの摘出手術をし、完治して、また絵が描けるようになった時はうれしかつた、と話してくれた。だが、今になって、また再発したというのだ。いきなり暴れ出したそうだ。そして、末期だつた。息子には話さなかつた。話せなかつた。余命三ヶ月。その言葉は、息子にも、自分自身にも、どんなに分かりやすく説明しようとしても、飲み込めない言葉だつた。

妻は取り乱したりしなかつた。治療しても、もう治らないならと、少しでも苦しんで生き延びるより、何もしないでも大切な時間を三人で過ごす方が、自分のためにも、聡ちゃんの為にも、あなたの為にも、良いと思うの、と、微笑んだ彼女の目には、涙が溜まつていた。

九十日間。この九十日間が、妻が人生で一番大切にしたい時間だつた。

あるあたたかい春の朝。妻が、息子に連れて行って見せてあげた場所があると言つた。ピクニックなんて久しぶり、と言つて二人でサンドイッチを作つた。昼頃、三人で外に出た。あたたかい風は若芽の香りを運んできた。

妻が息子に見せたかつた場所は、住宅街の隅の小川だつた。透明な水には小さな魚が跳ねるように泳いでいた。息子は川に手をつけて、楽しそうにしていた。微笑んで妻は言つた。

「夏になったら、川に入れるでしょう。そしたら、またここにきて

川遊びができるといいわね」

もう、三人で外に出るのが、これで最後だろうと、そう思った。

予想は的中した。外れてほしかった。夏が始まる前の、暑い日、妻は、入道雲の向こうに行ってしまった。息子はまだ何もわかっていなかった。

妻が亡くなって、初めて、自分は夢を諦めたのだと実感した。「綾瀬千恵」は、自分の人生を変えた存在だった。

墓参りが済んで、三時ごろにはもう自宅の最寄り駅に着いていた。まだ青空が広がっていた。急に、喉が渴いてしまった。

帰り道の途中にある公園に寄って、自販機で炭酸飲料を買った。ベンチに座り、それを飲んだ。昔より、炭酸が強く感じた。異様に喉が痛くなった。

「おじさん、なんでこんなところにいんの？」

少年の声だった。おじさん。俺のことだ。おじさんといったら、公園にいるのは自分一人だけだ。顔を上げると、やんちゃそうな少年が立っていた。

「いや、君も、何で平日にこんなところにいるんだい？」

こっちの台詞だ、と遠回しに言ったつもりだ。

「だって、今日は夏休みだよ？」

そうか、夏休みか。

「だから、なんでおじさんがこんなところにいるのかなっておもっ

「たんだよね」

「今日は、仕事が午前で終わったんだ、それで、喉が渴いて…」
ふうん、と少年は納得したように呟いた。

「ひとりなのかい？」

と訊いた。

「うん、そう。ね、おじさん、話し相手になってよ、つまんないんだよねえ、ひとりって」

不思議だ、あまり、嫌な気はしない。渋々ではあるがこくりと頷いた。すると、彼はすとんと隣に座った。

「あつよいね、さいきん。誰もいないんだよね」

「アイスみたいに溶けちゃうよなあ」

「でもおれたちアイスくらい冷たくないよ」

「はは、それもそうだなあ」

「そうだ、おれの名前ね、マコトっていうの」

「マコトくんか、カッコイイね」

「でしょーっ、とマコトくんは笑った。

「おじさん、今日は午前で、仕事終わりだったんだ、いいね、そういうの、ラクでしょ」

「ああ、楽っちゃあ楽かな、でも今日は俺の奥さんのお墓参りに行く為だったから」

へえ、とマコトくんは同情もせず、足で砂に丸を描いて、また納得したようにつぶやいた。

「じゃあ、シングルファザーだよね、おじさん」

「なんでわかるんだい？」

「わかるよ」

「はあ…。マコトくん、何年生なんだい？小学生？」

「小学生だよお、三年生、おじさん、なんで口開けっぱなしなのお」
マコトくんは足を少しゆすって、けらけらと笑った。

マコトくんは、なんだか不思議な子だった。話していると、背中のおもりを横に置いて一息つけるような、なんといいばいいかわか

らない気持ちになった。

「おじさんのムスコさんは、何年生？」

「中学二年生、マコトくん、この近くの学校言ってるなら知ってるかもしれないね、さがみそうたって言うんだけど」

「しってるよ」

マコトくんはにっこり笑った。

「やっぱりそうだよな、みどり小だったんだね、マコトくんも」

「そうだよ、偶然だあ、そうたくん、いつも絵を描いて賞とってたから」

「しってるのかあ、そうかそうか」

「絵、まだ描いてる？」

「うん、あいつは美術部に入ったんだ」

「だよね、やっぱり」

マコトくんはやっぱりね、そうだよね、うんうん、と頷いた。

「おじさんも絵、描いてた？」

「もうとっくに辞めちゃったけどな」

「だからじゃない？そうたくん、みんなよりぜんぜん絵うまいもん」

「そうかあ、まあ、俺の奥さんは、絵本描いてたんだよ、すごく有名だったわけじゃないけどな、色々描いてたよ、それが引き継がれたんだろうな」

「ふうん、たとえば？なんてなまえ？」

「ん、いや、知らないと思うぞ」

「知ってるよ、きつと」

「うーん、るりちゃん、って聞いたことあるかい」

「あるよ、昔本棚にあったもん」

「そうなのか、嬉しいな、奥さんのだけど」

「おれもね、絵、かくんだよ、きょうりゅうの絵とか」

「そうかそうか、いいじゃないか、きつともっと上手くなるぞ、頑張ったら」

「マジ？うっそー、じゃあさ、宇宙飛行士の絵も描けるようになる

かなあ」

「宇宙飛行士になりたいのかい？」

「うん、そーだよ、おれ、宇宙飛行士の絵描いてお母さんに見せてあげんの、おじさんにも今度見せてあげる」

うちゅーっ、と上を指さしてマコトくんは笑った。

「はは、うれしいな、マコトくんのかあさんもきつと喜ぶんじゃないか」

「うん、たぶんね」

マコトくんは空を見上げたままつぶやいた。

「おじさんって、昔、しょうらい何になりたかったの？」

「画家だよ」

へえ、とマコトくんはうなずいて

「だとおもった」

と言った。

「あきらめた？」

「あきらめちゃったなあ」

「描いたらしいのに」

マコトくんはまだ上を向いていた。

マコトくんの話を聞くよりも、マコトくんにたくさん質問をされて、少し疲れてきたところに、四時のチャイムが鳴った。この周辺は、四時と、夏冬で分かれてまた別の時間にチャイムが鳴る。

「たしか小学三年生までだったっけな、この鐘で帰らなくちゃならないのは。もう帰る時間じゃないか、マコトくんは」

「あれ、ほんとだ、おじさん、今日は話し相手になってくれてありがとね、またいつかね」

「ああ、今度はアイスおごってやる」

「冬だったら肉まんがいいけど」

「はは、いつか会えたらな、今日は雨が降るらしいから早く帰りなさい」

マコトくんはまた、けらけらと笑った。

「ねえおじさん」

マコトくんは言った。

「なんだい」

「おれさ、おじさんのこと、全部知ってたよ、夢をあきらめちゃったことも、そうたくんのことも、おじさんのおくさん、いや、おかあさんのことも、るりちゃんだって、ぜんぶ。おじさん、帰ったら、クローゼットをあけて」

ころもがえ、と言ってマコトくんは笑った。

「ばいばい、すぐ会えるよ」

家に帰ってすぐ、クローゼットを開けた。冬のジャンパーやコートがかけられている。下に、本がたくさん置いてあった。息子の読んでいた子供向けの図鑑、辞書。アルバム。そして、妻の描いていた絵本。暗くてよく見えない。ごっそり本をリビングに持って行った。

懐かしいなあ。妻の絵本を見るのは久しぶりだった。ひとつ、目に留まるものがあった。

『しょうらいのゆめ』。すぐそれを読んだ。ある男の子が、将来の夢について考えて考えて、気付いたら夜になっていた。夜の闇に点々と輝く星と流れ星を見て、宇宙飛行士になる、と決心する。ただそれだけの話だった。

その男の子の名前は、マコトくんだった。

そうかあ、そうだったのか、と、なぜか笑ってしまふ。ありえないことなのになあ。

絵、たまには描いてみるかあ。

ぱたんと本を閉じた。裏表紙には、宇宙飛行士の絵が描かれた大きな紙を持って笑っているきみがいた。